

過保護な警視の  
溺愛ターゲット

*Hatsumi & Soichiro*

---

桧垣森輪

*Moriwa Higaki*

termity



エタニティ文庫

## 目次

過保護な警視の溺愛ターゲット

5

書き下ろし番外編

過保護な警視の不憫な妹と部下と、従順な弟

301

過保護な警視の溺愛ターゲット

## プロローグ

あれは、私——陸永初海むつなつみがまだ六歳の、ピカピカの一年生のときだった。

「お嬢ちゃん、可愛いねえ」

大きなランドセルを背負い、ひとりで下校していた私は背後から声を掛けられた。

振り返った先にいたのは、見ず知らずのおじさんだ。

最初に断っておくが、私は決して美少女ではない。容姿ならば、お隣に住んでいる成瀬三佳ちゃんせみかのほうがよっぽど華やかで女の子らしい。私は普通の、地味で目立たない女の子だ。

この日も三佳ちゃんと一緒だったら、私が声を掛けられることはなかったと思う。いつもは三佳ちゃんと、その双子の兄である亮ちゃんりやうの三人で登下校しているのだけれど、たまたまタイミングが合わずにひとりで下校していた。

そんな私に可愛いと言ったおじさんは、全身黒ずくめにマスク姿という、いかにも怪しい格好をしている。顔は見えなくとも口角は上がっている気がするし、興奮している

のか鼻息も荒い。

「ランドセルが重そうだね。おじさんが、車で家に連れていってあげるよ」

目を細めたおじさんは恐らく笑いながら、ゆっくりと私に近づいてくる。

たしかに、教科書やノートが詰まったランドセルはちと重い。だからといってヒョイヒョイ車に乗るほど、私も馬鹿じゃない。

『イカのおすし』——いかない、のらない、おおきなこえをだす、すぐにげる、しらせ、は、学校で教えてもらった大事な「おやくそく」だ。

危険を感じた私は、おじさんを無視して家に向かって走り出す。

——だって、どう考えたって変な人だもん！

だが、小学生の足ではあつという間に追いつかれ、思いきり腕を掴まれてしまった。

「痛い目に遭いたくなかったら大人しくしてろ」

耳元で囁かれた低い声に、幼い私は怯んで固まってしまふ。

おじさんの手を振りほどきたくとも、子供の力ではどうにもならない。ジリジリと身体が引きずられ、離れた場所に停めてあった、おじさんのものと思われる車のほうに連れていかれる。

——このままだと……

「や、やだ……」

運悪く周囲に人通りはなく、本当に恐怖したときには咄嗟に大声が出るものでもない。やっとの思いで絞り出した声はか細くて、とても誰かに届くほどではなかった。だけど——

「おい、おっさん。その手を離せ！」

突然聞こえた第三者の声に、涙で滲んだ視線を向ける。

黒ずくめのおじさんと車との間に、同じく黒ずくめの誰かが立っていたのだが——  
逆光で、顔が見えない……

何度か目を瞬かせていると、ほんやりとしていたシルエットが徐々にはつきりしていく。

「総ちゃん……？」

中学校の制服である学ランに身を包んだ、お隣のお兄ちゃんがそこにいた。

成瀬総一郎——総ちゃんは、三佳ちゃんや亮ちゃんの八歳年上のお兄ちゃんだ。お隣

さんだし、幼なじみの兄なので顔を合わせることはあるが、実はそれほど親しくない。

見栄えのいい成瀬きょうだいの中でも、長男の総ちゃんは群を抜いている。六歳の私にとつて、総ちゃんは年の差以上に立派な大人だった。さらに彼は、気軽に声を掛けられるほど愛想がよくないため、せいぜい挨拶する程度の仲でしかない。

それでも、この危機的状況での見知った人物の登場に、ホッとした私から力が抜ける。

「その子をどうするつもりだ？」

総ちゃんが眼光を鋭くした瞬間、おじさんの喉からヒイツと奇っ怪な音が漏れた。

総ちゃんは中学生ながら、おじさんよりも背が高かった。おまけに、体つきもガツツリとしていて、おじさんを相手に喧嘩をしても負けそうな気配がない。

あとで知ったことだが、総ちゃんは子供の頃から武道の心得があった。日々肉体を鍛錬している少年と、小学生をコソコソ連れ去ろうとする中年オヤジとは、力の差は歴然としていたのだろう。

「くそつたれ！」

自分が不利だと本能的に察したおじさんは、掴んでいた私を総ちゃん目がけて投げつけた。

「——っ！」

ブッと周囲の景色がすごい速さで移動して、またもや声が出なかった。

スローモーションになる視界に映ったのは、大きく広げられた両手と、制服の金ボタン。

次の瞬間——全身を包み込んだあたたかさを、私は今でも覚えている。

かなりの勢いでぶつかったはずが、不思議と痛みはなかった。私を受け止めた総ちゃんの身体はうしろへ傾き、尻もちをつく。

一方のおじさんは、一目散に車まで戻ってその場から逃げようとしていた。

「待て……！」

総ちゃんは、あとを追うためにすぐさま立ち上がるうとしたのだけれど、それを制したのは他ならぬ私だった。

「総、ちゃ……」

総ちゃんが離れてしまうことに漠然とした不安を感じて、必死にしがみついた。

「こ、こわかった、よう……」

このときになってようやく、頭の中にお父さんとお母さんの顔が浮かんだ。もしも連れていかれたら、両親にも友達にも、二度と会えなかったかもしれない。

すぐそばにある総ちゃんのぬくもりだけが、自分が無事だと証明する唯一のものだった。

ぼろぼろと涙を零しながら震えていると、ふたたび力強い腕に抱き締められる。直後、私たちのすぐ脇を、急発進した車が走り去った。

「——もう、大丈夫だ」

車の音が遠くなった頃、総ちゃんの大きな手が私の頭を優しく撫でる。

ゆっくりと顔を上げると、優しい笑顔の総ちゃんが、すぐ近くから私を見下ろしていた。

悪の手から自分を救ってくれた、正義の味方——私には、そう見えた。

「怖かったね。怪我は、していない？」

おじさんに凄んでいたときと違う穏やかな声に、かあっと全身が熱くなる。

「今日は、亮次郎と三佳は一緒にやらないの？」

問いかけに、無言で首を縦に振る。さっきまでの恐怖ではなく、別の緊張から言葉が出ない。

弟たちの不在を知った総ちゃんの眉間には皺が寄る。

「そうか……なら、念のために二人も迎えに行くか——」

「イヤッ！」

総ちゃんの言葉を食い気味に遮った。

「大丈夫だよ、先に家まで送るから」

「イヤだ！ 総ちゃんと、一緒にいい！」

ぎゅうつと、総ちゃんの身体に抱きつく手に力を込める。

置いていかれるという不安もあった。でもそれ以上に、総ちゃんが弟と妹を心配しているのが、嫌だった。

私はひとりっ子で、総ちゃんのように自分を守ってくれる兄はいない。三佳ちゃんと亮ちゃんは大好きだけれど、それだけは妬ましかったのかもしれない。

総ちゃんには、近寄りたいたいという印象もある反面、惹かれていた。

三佳ちゃんの家に遊びに行ったとき、総ちゃんがいるといつも緊張する。たった一言挨拶するだけなのに胸がドキドキして、素っ気なくとも返事をしてくれどとホッとした。私には無愛想な総ちゃんだけど、弟や妹と接するときには空気が変わる。赤の他人と家族では態度が違って当たり前なのに、自分だけが仲間外れにされている気がして嫌だった。

「あのね、亮次郎と三佳は、俺の大事な弟と妹なんだよ？」

「三佳ちゃんと亮ちゃんはいつも一緒だから、大丈夫だもん！」

わざわざ行かなくても、双子はいつもセットで行動している。だったら総ちゃんは、私のそばにいてくれてもバチは当たらないだろう。

大人になった今ならば、総ちゃんが自分の弟妹を案じる気持ちがかかる。だけど、このときの私は本当に子供だったから、そんなことを考える余裕もなかった。

三佳ちゃんや亮ちゃんのように、私も仲間に入れてほしい。

それだけじゃなくて――

「総ちゃんは正義のヒーローだよ。お願い、総ちゃん。私を守って」

恐怖体験をした直後だったからだろう。

ヒーローを、本気で、自分だけのものにしたかった。

「もちろん守ってあげるけど、あいつらのことも心配なんだよ」

それでもなお困った顔をする総ちゃんに、余計に腹が立つ。

「だったら私も、総ちゃんの妹になる！」

精一杯背伸びをして、総ちゃんの綺麗きれいな顔にこれでもかと近づいて、私は必死にお願いをした。

「私だって、総ちゃんとずっと一緒がいい。三佳ちゃんには亮ちゃんがいるのに、私には誰もいないから、総ちゃんだけは私のそばにいてほしいの」

大きく見開かれた総ちゃんの目に自分の顔が映る。

勢いに押されたのか、総ちゃんの視線が宙を彷徨うのがわかった。心なしか、顔が赤くなっていたような気もする。

「別に妹にならなくても、守ってもらう方法は他にも……」

「じゃあ教えて！ 私、なんでもするから！」

ぼそぼそとした呟きにも即座に反応するくらい、私は真剣だった。

そんな必死さが、通じたのかもしれない。

しばらく黙り込んでいた総ちゃんだけれど、やがて、意を決したように口を開く。

「それなら――」

続いた言葉に、私は迷いなく首を縦に振った。

それが、今日まで続く、長い長い束縛生活の始まりとも知らず――

### 第一話 その男、過保護につき

あれから、十五年の歳月が流れた。

――困ったことになったな……

短大卒業後に就職をした私は現在、社会人一年目の二十一歳。仕事帰りに同僚と食事に行くのもよくあることで、今日も先輩に誘われて近くの居酒屋へとやって来た。

成人しているのだから、お酒を飲むことに問題はない。困っているのはこのシチュエーションだ。

私たちの向かいには、知らない男の人が座っている。それも、横並びにずらりと七人。「ちよつと、三佳ちゃん。これって、合コンじゃない？」

ヒソヒソと右隣に座る同僚の成瀬三佳に声を掛ける。三佳ちゃんは、家が隣同士で幼なじみの、あの三佳ちゃんだ。

長い年月を過ごしても私たちの友情は変わらない。小中高、短大と同じ学校に通い、選んだ就職先も同じ――まあ、そこには友情以外の、ちよつとした思惑もあるのだけ

れど。

とにかく私たちは、「姉妹」のように育った仲である。それこそ、置かれている境遇も同じ。だから、もちろん三佳ちゃんもこの状況に驚いていると思いきや、意外にも彼女に動揺している素振りはない。

「そうね。これで合コン以外だったら、逆にビックリよね」

彼女の返答を聞いて、改めて違和感に気づいた。

三佳ちゃんの服装が、今朝出社したときと変わっている。通勤時に比べて明らかにアクセサリーが多い。お化粧だって、仕事終わりなのにテカリもなくバッチリだ。

「三佳ちゃん、もしかして知ってた……?」

「当たり前よ。今日の発起人は七緒さんなんだから」

澄ました笑顔の三佳ちゃんは、自分の右隣へと視線を移す。そこには、最近婚活に力を入れている先輩が座っている。

「七緒さんの招集なら合コンよね。まあ、初海ちゃんには意図的に隠してたけど」

「……なんで?」

「そりゃあ、今みたいに緊張するからに決まってるじゃない」

三佳ちゃんの視線が、膝の上でガチガチに固まっている私の手へと移される。

たしかに合コンは得意ではない。小中学校は共学でも高校以降は女子校育才で、飲み



会に参加するようになったのもつい最近なのだから、こういうシチュエーションに慣れていないのは当然だろう。

—— だけど、緊張しているのはそんな理由ではない。

「このことは、許可、取ってる？」

私がないに不安を感じているのか、わからない三佳ちゃんではないはずだ。

私たちが合コンに参加していることを、「あの人」が知っているかどうか——

「許可なんて取るわけじゃないじゃない。情報が漏れないように、今日まで黙ってたのよ」

悪びれた様子もなく、三佳ちゃんはジョッキに口を付けた。

「確信犯かい！」

思わず声が大きくなったけど、掴みかからなかっただけでも褒めてもらいたい。

「ヤバイよ。この状況は、非常にヤバイよ!？」

「——あ、あ、初海ちゃん」

喉を潤した三佳ちゃんは、静かにジョッキをテーブルに戻す。

「飲み会に参加するのに、いつまでも保護者の許可が必要なのがおかしいの。私た

ちはもう、社会人なのよ？」

ふう、と一息吐いて、三佳ちゃんはその大きな目で前を見据える。

正面の男性を睨んでいるのではない。彼女が見ているのは、ここにはいない相手だ。

「今までどれだけ私たちが抑圧されてきたと思ってる？ 確な恋愛経験もなく、人の話ばかりを聞かされて。彼氏ができたとか、親に内緒で旅行に行ったとか、初エッチは彼の部屋とか……他人の恋バナは、いい加減うんざりなのよ！」

—— あ、これはマズイ。

ジョッキを握る手が小刻みに震えている。これは、話している間に、怒りに火が点いてしまったパターンだ。

「私だって、彼氏のひとりや二人ほしいの！ あの男が不在の今こそが、私たちに与えられた最高のチャンスなのよ！」

周囲を窺ったところ—— 熱弁を振るっていた三佳ちゃんは、多くの男性の注目を集めていた。

どれだけ合コンに気合いを入れているんだと、はつきり言ってドン引きだ。

「けど、ここが三佳ちゃんのすごいところでもある。

「やだ、私ったら気合い入りすぎ！ 恥ずかしい」

さっきまでとは打って変わった、鈴を転がすような愛らしい声と笑顔。思いきり顔を赤くして慌てる様に、周囲からは自然と笑いが起こる。

ただのぶりっ子なら反感を買うが、三佳ちゃんは見事にドジっ子を演じてみせた。

三佳ちゃんの可愛さは、相変わらず健在だ。わざわざ合コンに参加しなくとも、彼女

と付き合いたい男の人は大勢いるだろう。

それなのになぜ、彼女の恋愛経験が乏しいかといえば、彼女の家族——とりわけ兄たちが、過保護だから。

末っ子で唯一の女の子が目立つほど可愛いことから、心配になるのも無理はない。毎日の登下校は双子の兄の同伴が当たり前。部活もバイトも、もちろん禁止。交友関係も厳しくチェックされて、友達の家泊まりに行くにも兄たちの許可が必要だった。

女子校に通ったのも、彼らの強いすすめがあったからだ。成長するにつれて監視の目が行き届かなくなるのを危惧していたに違いない。

子供の頃に総ちゃんに対して『妹になりたい』と駄々をこねたせいで、私も同等の扱いを受けてきたのだが、大人になった今では自分にそんな価値がないことも理解している。

だって、三佳ちゃんに比べれば、私はいたって普通なのだ。

取り立てて不細工ではない、と思う。少々垂れ気味でも、ぱっちりとした目は自分でも気に入っている。童顔で背も低いけど、胸の大きさだけは三佳ちゃんに勝っているから、一部のマニアには受けがいいだろう。

今も、三佳ちゃんには男性陣からお声がかかっている。これだけ可愛い子が『彼氏がほしい』と公言しているのだから、男性陣は、俄然やる気になるだろう。

勘違いしてほしくないが、私には三佳ちゃんにコンプレックスがあるわけじゃない。

三佳ちゃんは、私の自慢の親友だ。だから、恋人がほしいと望むなら、このチャンスにその願いを叶えてほしい。

就職をして、実家を離れて、仕事帰りの飲み会にも参加できる。同僚たちとも気兼ねなく外出して——いちいち詮索されないこの自由を、ずっと手にしていきたい！

祝・解放！ ビバ・自由！

だからこそ、無断で合コンに参加したなんて、「あの人」には絶対に知られてはならない。

——まあ、そう簡単にバレることはないと思うけど……  
それでも、一抹の不安が拭いきれないのはなぜだろう？

「難しい顔しているけど、なにか考え事？」

ふと気がつくと、私の前にはさつきとは違う男の人が座っていた。

垂れ目の私は普段から困った顔に見られる。考え事をしているときは特に顕著で、三佳ちゃんからよく注意をされる。

「もしかして疲れてる？ そうだよねえ、お仕事お疲れさま」

彼は置いたままの私のジョッキを持つように促し、自分のグラスを軽くぶつけた。

「明日は休みなんだし、嫌なことはパーツと飲んで忘れなさい！」

「え、ええ……そうですね」

目の前の彼はすでにアルコールが回っているようで、テンションが高すぎて正直ついでいけない。

——それに、なんでわざわざ私に話しかけるんだらう？

私の横には三佳ちゃんがいるのに、と横目で確認して納得した。彼女の前にはすでに人が集まっている。

「俺、君みたいな大人しい子のほうがタイプなんだよね」

さしずめ、人気が集まっている三佳ちゃんを早々に諦めて、あぶれた私に流れてきたというところか。

三佳ちゃんとの対比で大人しそうだと言われがちな私だけど、実際はいつも無口でキョドっているわけではない。合コンよりも気になることがあるから黙っていただけで、心の中ではあれこれと突っ込んでいるわけだし、男の人と話すのが苦手なんてこともない。

「さっきから全然飲んでないけど、もしかしてビールは苦手？ だったらこっちを飲んでみなよ」

そう言って彼は、持っていたグラスを私にすすめてきた。

「カクテルなんだけど、口当たりがいいから飲みやすいよ。せっかくだから、親睦を深めようよ」

居酒屋の大きめのグラスになみなみと注がれたオレンジ色の飲み物は、見た目は普通のジュースに見える。

人当たりの良さそうな彼の笑顔に、胡散臭さは感じない。それに、合コンだからといって、彼氏探しを目的にしなくてもいい。新たな交友関係を開拓するために楽しんでもいいはずだ。

「そうですね、じゃあ——」

改めて、乾杯しようとしたときだった。

「——飲むな」

低く響いた声と共に、通路と座敷を隔てていた襖がスパンと開く。

聞き覚えのあるその声に、私の身体がピシリと固まった。

開いた襖は私の左側にあるのだが、怖くてそちらを見ることができない。わざわざ見なくとも、流れてくる冷気のようなものが顔の半分にひしひしと伝わってくる。

だから仕方なく、反対側の三佳ちゃんのほうを向いた。そこで、さっきまで楽しそうに談笑していた彼女の顔が青くなっているのを見て、確信した。

——そこには、絶対に会いたくなかった人物が、いる。

しばしの静寂せいじやくのあと、三佳ちゃんの絶叫が響く。  
「ぎゃあああつ！ お、おに……な、なんで!？」

——鬼ではない、お兄ちゃんだ。

観念して振り向いた先には、大男が立っていた。

「そ、総ちゃん……」

総ちゃんとは、幼い頃に私を助けてくれた、あの総ちゃんだ。

いつの間にかデフォルト装備になった銀フレームの眼鏡の奥で、少し吊り上がった切れ長の目が私を見てさらに細められる。

紅顔こうがんの美少年だったのは遠い昔。以前から武道を嗜たしなんでいた総ちゃんは、あれからさらにその道を極め、すっかり筋骨隆々とした大男になっていた。

緩ゆるいくせつ毛の黒髪を撫でつけたオールバックに、屈強で筋肉質な身体に似合うよう仕立てられたオーダーメイドのイギリス製のダークスーツ。

よく通った鼻筋とふつくとした唇は、人目を惹く美形であることに間違いない。

間違いないのだけれど、兎とにも角かくにも愛想がない。

普段から仏頂面ぶつちやうめんだけれど、さらにこの状況に余程お怒りな様子で、全身からブリザードを吹き荒れさせている。

「亮次郎の仕業ね……!？」

三佳ちゃんの声に反応して、大男の背後から穏やかな笑みの青年がひょっこりと顔を出した。

「ごめんね。でも三佳だつて合コンのことを黙ってたんだから、おあいこだよね」

テヘッと舌を出した顔は三佳ちゃんとよく似ている。成瀬家次男の亮次郎は、三佳ちゃんの双子の兄。

二卵性とはいえ、基本的に二人は顔の造りも雰囲気もよく似ている。成瀬家のきょうだいの中で長兄だけが、悪の元締めみたいな風格なのだ。

その仏頂面ぶつちやうめんの長男は、しばらくジッと周囲を見回していると思ったら、俊敏な動きで私のグラスを取り上げた。

「男にすすめられたものを、なんの躊躇ちゆうちゆもなく飲むとするな」

「な……っ!？」

——いきなり出てきて、飲み物にまで制約をつけるの!？」

「私だつて、もう大人なんだからお酒くらい飲めるし!」

カクテルなんかコンビニでも売っているし、飲み会だつて今日が初めてでもない。

総ちゃん是我的抗議などどこ吹く風といった具合で、グラスに鼻を近づけた途端に眉間に皺しわを寄せる。

「この酒は見た目に反してアルコール度数が高い。それに、どこかの輩やからがさらに酒を追

加していないとも限らない。そうになったら、慣れていない初海は一撃で潰れるぞ」

「え、そうなの!？」

「本当だ! 彼のうしろに酒瓶があるね。ウォッカベースのカクテルに、さらにウォッカを追加したのかな?」

総ちゃんの陰から身を乗り出した亮ちゃんが、男の人たちの背後をまじまじと覗き込む。

「気に入った女の子に強いお酒をすすめて、酔い潰れたところをお持ち帰りする……よくある昏睡レイプの手だね」

にこやかな亮ちゃんから飛び出した物騒な言葉に、その場にいる男女共に顔色が変わった。

「……や、やだなあ! そんなこと、するわけないじゃないですか」

アハハと乾いた笑いを漏らしながら、目の前の彼が身体をずらしてなにかを隠そうとしたのを、私が見逃すことはなかった。

だって、あからさまなんでもん。これでは、どうぞ疑ってくださいと言っているようなものだ。

「なら、この酒に入ったアルコール量はどう説明する?」

「店側のミス、じゃないですか?」

「僕の知り合いに君たちと合コンしたって女の子がいるんだけど、そのとき妙な話を聞いたんだよねえ」

総ちゃんが厳しく追及し、亮ちゃんが追加情報を投入する。相変わらず見事な連携プレーである。

こんなふうに関詰められれば、たいていの人間はボロを出す。

「そんなこと知るかよ! それに、俺がやったなんて証拠もない……っていうか、あなたたちは誰だよ。いきなり乱入してきて、わけわかんないこと言い出してさ」

自分が疑われ始めたら真っ先に他人のミスだと言い逃れようとするのも、証拠云々を持ち出してくるのも、いかにも胡散臭い。

さっきまでは何んともなかったのに、途端に彼が不審人物に思えてくる。

私でさえ気づくのだから、それがわからない総ちゃんではない。

「そうか。なら、君たちの持ち物を調べさせてもらおうか」

「な、なんでだよ!? あんたになんの権利があつてそんなこと言い出すんだよ」

——それが、あるんだなあ……

一般人には与えられていないけれど、犯罪が疑われる場合に職務質問をする権利が、総ちゃんにはある。

「名乗るのが遅れた。俺は、その二人の保護者だ。ついでに——こういう者だ」

そう言いながら、総ちゃんが胸ポケットから取り出したのは警察手帳――

「け、警察……!?!」

わかりやすく狼狽える彼に、総ちゃんはほんの少しだけ口角を上げた。

「さあ。うちの妹たちになをしようとしたのか、きっちり話してもらおうか？」

やっと笑ったと思つたら、なんてドス黒い笑み……

幼い頃に私を救ったヒーローは、真正正銘の「正義の味方」になっていた。

結局彼らは所持品の確認を拒否して、逃げるようにその場から去って行った。警察手帳まで持ち出した総ちゃんだけど、被害がなかったことからあとを追うことはなく、合コンはそこでお開きとなった。

――つていうか、全員グルだったんかい！

その後、私と三佳ちゃんは、居酒屋近くのファミレスへと連行された。

優雅にコーヒーを飲む総ちゃんと、ニコニコしている亮ちゃん。私たちは俯いたまま、いろんな意味での反省会の真っ最中である。

「なんで……お兄が、ここにいるのよ？ 地方での研修期間はまだ終わってないはずでしょ?!」

恨めしげに目の前の人物を睨み上げる三佳ちゃんは、さすがに兄妹だけあつて勇気があつた。私たちが実家を脱出できた要因は、総ちゃんが先に実家を離れたからだ。なんでもできるお隣のお兄ちゃんは、本当に優秀な人だった。中学高校と地元でも有名な進学校でトップの成績を収め、末は博士か大臣かみたいそう期待されていた。しかし、いよいよ大学進学となったとき、総ちゃんが希望したのは、実家から通える地元の大学だった。

多分それって、妹と――ついでに私が心配だったからだよね？

ただでさえ過保護なんだって話だけど、さすがに周囲が必死に説得したらしい。三佳ちゃんによると、高校の校長先生と学年主任が菓子折持参で夜な夜な訪ねてきたそうだ。結局総ちゃんが折れる形で、日本でもトップクラスの都心の大学に渋々進学した。

――まったく乗り気じゃなくせに、楽勝で合格するってどうなのよ？

その後、総ちゃんが選んだのが警察官という職業だった。

子供の頃から正義感が強かったから、警察官になるのは納得できた。しかし、そこでも本人は、交番勤務のお巡りさんを希望したらしい。

――トップの大学を卒業した人が、迷わずノンキャリアを選択するってどうなのよ？

お巡りさんだつて立派な仕事だけど、総ちゃんを選択するには障害が多かった。当然、ここでも周囲に説得され、紆余曲折を経て総ちゃんは警察庁へと入庁した。

本人が思い描いていた未来とは違っていかもしれないが、順調に出世しているご様子だ。今年に入り、研修を兼ねて地方へ赴任していた。

だからこそ私たちは、二人で画策かくさくをして実家を出た。同じ職場を選んで、二人でルームシェアすることを条件に両親の承諾を得た。

総ちゃんには事後報告だったけれど、『二人で同じ職場を選んだことは褒めてやる』と一応認めてもらった。亮ちゃんが通う大学の近くに就職したことも、幸いだと思う。だけど、いずれ総ちゃんは東京とうきょうに戻ってくる。それまでに、やりたいことをして、こつちでの生活を整えてしまおうと思っていた。

なのに――

「研修期間はまだ終わってないけど、警視庁でちょうど欠員が出たから、兄さんが警視庁に所向になって東京へ呼び戻されたんだって。すごいよね」

総ちゃんに代わって、亮ちゃんが私たちの疑問に喜々ききとして答える。

――くっ、この、エリート様が！ 研修期間が短縮せんさくになるなんて、どんだけ優秀なのよ!?

ちらりと様子を見ただけなのに、眼鏡の下の涼しげな目とバツチリ視線が合ってしまった。

「誰かさんたちと違って、日頃の行いおこなひがいいだけだ」

――人の心を、読まないでほしい。

「亮次郎は、知ってて黙ってたのね?」

三佳ちゃんが亮ちゃんをジロリと睨にらむ。

「だから、おあいこだって言ったでしょ?」

「そもそも、なんであなたが合コンのことを知ってるのよ!？」

「バイト先に来た三佳たちの会社の先輩から、偶然聞いちゃって」

偶然なんて白々しい。亮ちゃんは笑顔の爽さわやかな好青年だが、実は兄の忠実なスパイだ。

亮ちゃんは最近、私たちの会社近くのカフェでアルバイトを始めた。オシャレでリーズナブルと女子社員たちの人気が高く、ランチタイムや仕事終わりによく利用される憩いの場だったりする。

彼のことだから、よく調べた上でのカフェを選んだに違いない。だって、入社してすぐに七緒さんに連れられて行った頃にはいなかったのに、ある日突然働いていたんだから。

きつと、カフェで合コンの話聞いて、三佳ちゃんの予定と擦り合わせたんだらう。眼鏡のブリッジを指で押し上げた総ちゃんは、真っ直ぐに三佳ちゃんを見据みすえた。

「黙っていたということは、うしろめたさはあるんだな?」

カチリとコーヒークップをソーサーに戻す音を聞き、緊張が走る。

「うう……っ、それは……」

ぐっと喉を詰まらせた三佳ちゃんは、そのまま黙り込んでしまった。

反論できるはずもない。三佳ちゃんや亮ちゃんの兄への服従心は、昨日今日仕込まれたものではない。

「総ちゃん、三佳ちゃんの気持ちもわかってあげて。私たちだってもう社会人なんだから、先輩に誘われたら無下には断れないよ」

切れ長の目がこちらに向けられても、怯んではばかりはいられない。

「正直に話しても絶対に反対したでしょう？ でも、先輩の誘いを断る理由が保護者の反対なんて、それこそ社会人としてどうかってことになるじゃない」

三佳ちゃんが乗り気だったというのはこの際置いておく。そこを突っ込み出すと、話がまた長くなるからね。

とにかく、総ちゃんのほうが社会人としても先輩になるのだから、似たような経験はあるはずだ。

社会に出たからには、私たちも立派な大人だ。

ドヤ顔で正論をかざしてみたものの、総ちゃんに冷たく一瞥された。

「そういうことは、自分で自分の身を守るようになった人間が言うことだ。俺たちが

あの場に踏み込んでいなかったら、自分が今頃どうなっていたかわかっているのか？」

ジロリと睨まれ、形勢の不利を悟る。

——そうでした。助けられておいて、言えることではありませんでした。

「そ、そういうえば……三佳ちゃんは平気だった？ 変なもの飲まされてない？」

「私は、自分で頼んだものしか飲んでないよ」

「三佳は初海と違って警戒心が強いからな」

——ううっ、さりとて言われた厭味が刺さる。

美人で、男の人からのアプローチに慣れている三佳ちゃんは、私よりも奔放なだけ自己防衛能力が高い。

「……総ちゃんはどうして、あの人たちが怪しいってすぐわかったの？」

思いきりトーンダウンした私に、総ちゃんは小さく笑った。

「そんなの、初海に言い寄ってたからに決まっている」

残りのコーヒーを飲み干して、ゆっくりとカップをソーサーに戻す。

眼鏡のブリッジを指で押し上げ、長い脚を組み替える姿は、一瞬ここがファミレスなのを忘れるほど優雅だ。

年を重ねるごとに、総ちゃんはますますその魅力を増している。



——中身は、相変わらず過保護のままだけ。

「おまえの周りには、碌な男がない」

ずいぶん失礼な物言いだが、総ちゃんが言い切るには根拠がある。私は、昔からとにかく男運が悪い。

小学校の頃に連れ去られたのを皮切りに、不審者と呼ばれる類いと遭遇したことは数知れず。

電車に乗れば痴漢に遭い、道を歩けば露出狂に当たる。三佳ちゃんと一緒にいても、狙われるのはいつも私。

二人でいるのに、突然現れたおじさんが私にだけ見えるようにいきなりコートを広げたとときには、さすがに泣いた……

多分、目を惹くのは三佳ちゃんだけど、私のほうが「チョロそう」に見えるせいだろう。攻略が難しそうな山に挑戦する前に、すぐ近くにある低い山で小手調べするのと同じだ。

そして私が危険な目に遭うたびに、助けてくれるのが総ちゃんだった。

三佳ちゃんや亮ちゃんから呼び出されると、総ちゃんはいち早く駆けつけ、あつという間に変質者を撃退してくれた。

ときには、悲鳴を聞きつけてどこからともなく現れたこともある。泣きながら家に

帰ったときは、落ち着くまでずっとそばにいてくれた。

だから私も、結局は総ちゃんに頭が上がらない。

「とにかく初海は、もつと自分の男運の悪さを自覚しろ」

「はい……」

決定的な出来事のあとだから、反論の余地はございませんでした。

その後も延々と説教されて、帰宅する頃には私も三佳ちゃんも疲労困憊だった。

もうお風呂に浸かって早く寝たい。だけど、最後にまだ難関が残されていた。

「だから、どうして俺を部屋に入れられないんだ？」

「逆に、なんでお兄が入る必要があるの？」

「セキユリテイのチェックとか、設備に不備がないか確認しないといかんだろう」

「そんなの、入居するときにちゃんとしたから！ 設備の管理はお兄じゃなくて管理さんの仕事だから！」

私たち二人は総ちゃんにアパートまで送り届けられたのだけど、そこから部屋に上がる上からないの押し問答が、かれこれ三十分は続いている。

矢面に立っているのは三佳ちゃんだが、彼女が頑なに拒むのには理由がある。

そんなことをしたら、秘密がバレてしまうからだ。

私たちはルームシェアをしていることになっているが、実は真っ赤な嘘である。

三佳ちゃんのアイデアで、同じアパートの同じ階でも、実際には一部屋ずつ借りている。玄関も生活空間も別の、普通の一人暮らしだ。

ルームシェアと大差ないと思うなかれ。誰かと空間を分けるのと独占しているのとは、気楽さがまるで違う。たとえ無二の親友でも、四六時中一緒なのは、やはりどこか息苦しい。特に私たちは職場も同じだから、プライベートくらいお互い自由になりたい。

家がその人にとつての城だとは、よく言ったものだ。

「初海ちゃんだって、急に来られたら困るよね!？」

「そ、そうだね……洗濯物とか、そのままになってるし」

「だよね!? それに、私たちの部屋は男子禁制! たとえ身内であっても認められませんが!」

……本当は違うけど。当初、女性専用のアパートを借りる案もあったけど、それは三佳ちゃんが断固として反対した。理由は——いつか彼氏ができたときのために他ならない。

「とにかく、今日は無理だから! もう遅いし、近所迷惑だからさっさと帰って!」

総ちゃんは納得いかない様子だったが、この勝負は三佳ちゃんが押し切って勝利した。

「ああ……疲れた……」

エントランスで、去って行く車を見送りながら肩を落とした三佳ちゃんは、疲れ切っていた。

「お疲れ様。三佳ちゃん、ナイスファイトだったよ」

「今後の対策も立てなきゃだけど、今はもうそんな元気ないや……」

「そうだね。今日はゆっくりして、また考えよう」

お互いの苦勞を<sup>ねが</sup>いながら、それぞれの部屋へと戻っていった。

アパートの裏手——部屋の灯りが確認できる場所に、一台の車が停まったことも知らず。

——ピンポン。

翌朝、まだベッドの中にいた私は、来客を告げるチャイムで目を覚ました。

普段から、住民の誰とも交流がなければ私も警戒しただろう。だけど、私の隣には三佳ちゃんが住んでいて、日常的に行き来がある。

きつと三佳ちゃんが朝食でもねだりにきたのだらうと、ゴソゴソと布団を抜け出して、備え付けのモニターを確認することもなくドアを開けた。

「だけどそこに立っていたのは、三佳ちゃんとは似ても似つかない、だけどちよつとだけ血縁を感じさせる風貌の大男——」

「おはよう、初海。誰かも確認せずにドアを開けるなんて、不用心だな」

昨夜とは違う、カットソーにチノパンというラフな私服姿の総ちゃんは、下ろしたままの前髪をかき上げながら口元を歪める。

笑っているようで笑っていない総ちゃんを見て、思わずドアを閉めようとした。

だがそれよりも早く、サツと伸ばされた脚によって阻まれる。……くそつ、ガサ入れで培った技か!?

「そそそ総ちゃん、な、なんで……」

言いながら必死でドアを引っ張ったのだけれど、力で敵うはずもない。よくわからぬイドス黒い笑みを浮かべた総ちゃんは、ぐいっとドアをこじ開ける。

「昨晚、今日は無理だと断られたから日を改めたんだが、なにか問題でも?」

問題なんか、大アリに決まっている。

「わ、私まだ起きたばかりで、パジャマだし。部屋も、片付いてないから」

それに、ここには三佳ちゃんがいらない。踏み込まれたら、二人で一緒に住んでいないことがバレてしまう。

「初海のパジャマ姿なんて見慣れてる。ああ、でも……言われてみれば久しぶりかな」

そう言って私を見つめる総ちゃんに——ゾクツとした。

——そもそも、総ちゃんはどうかやってオートロックを突破した?

しかも、私の部屋も見事に当てている。

「心配しなくても、ここに三佳がいらないことは知っている」

「へ——!?!」

混乱した私の身体がよろめき、力なくその場にしゃがみ込んでしまう。

その際に、ボタンとドアが閉まる音が響いた。

「ほら、簡単に部屋に入った。おまえには警戒心が足りないんだ」

私を正面から見下ろす総ちゃんの瞳には、見たことのない黒い炎が浮かんでいる。

総ちゃんに見られて背筋が凍ることは何度もあった。それは親に叱られる子供や、飼主とがに咎められるベットのような心境だったのだけれど、なにかがいつもと違う。

「み、三佳ちゃんは……?」

「昨日のうちに亮次郎の部屋に引っ越していった。今日から、この部屋の隣には俺が住む」

「へ——!?!」

「おまえは逃げられなくて残念だったな」

膝をついた総ちゃんが、しゃがみ込んで私と目線を合わせる。

そして妖艶な笑みを湛えながら、言った——  
「言っただろう？ おまえの周りには碌な男がいない——俺を筆頭にな」

## 第二話 ヘンタイが現れた！

週明けというのは憂鬱になるものだけど、今日ほど待ち遠しいと思ったことはない。

「三佳ちゃんあああん！」

「——おっふ！」

会社のロッカールームで着替え中の三佳ちゃんを見つけて、飛びついた。

これまで、毎朝一緒に通勤していた親友と、二日ぶりの再会である。

「ああ……初海ちゃん、おはよう」

上半身下着姿という状態でいきなり背後から抱きつかれた三佳ちゃんは、奇妙な声を出したあとで私の仕業であることを確認し、目を泳がせた。

「み、三佳ちゃん、なんで、なんで……!？」

「わかつてる。わかつてるから、落ち着いて」

——落ち着いてなんかいられるもんですか！

だけど、周囲の目もあるということで、ひとまず三佳ちゃんから引きはがされる。

「なんで？ なんていきなり、総ちゃんが引越してきたの!？」

「大変だったよね。でも、五体満足そうでなにより」

一定の距離を保った三佳ちゃんは、私の全身をジロジロとチェックする。

「見た目は変わらないのね」

意味不明な呟きをしながら、なんとなく生温かい目をしているのはなぜだろう？

「精神的には大ダメージだよ！ 本当に大変だったんだからあ……」

「まあ、その件について朝っぱらから話すのはなんだから、お昼休みにでもゆつくりとね？」

どうして朝から話しちゃいけないのかわからない。今すぐにでもぶちまけたいの、焦らすなんてこの小悪魔め！

そりゃあ、始業前に終えられるほど短い話でもないけれど。

私の脳裏には、この二日間の悪夢のような出来事が次々と蘇る——

「本当にもう、大変だったんだから……」

待ちに待った昼休み。

社員食堂でランチをしながら、私は言いたくて仕方がなかった愚痴をひたすら三佳

ちゃんにぶつけていた。

ちなみに、いつも利用しているカフェの利用は自粛した。あそこには総ちゃんの忠実なしもべがいるから、なにを報告されるかわからないしね。

過保護な総ちゃんから逃げるためにあれこれ画策してきたのだけれど、とつくの昔にバレていたらしい。三佳ちゃんは部屋を乗っ取られ、私の隣人は妹から兄にチェンジした。

「勝手に乗り込んできたくせに、引越しの手伝いまでさせたんだよ？ 買い出しにも連れていかれて、近所の案内させられて、それから三佳ちゃんの部屋の掃除でしょ……ああ、三佳ちゃんの荷造りは私がしたからね。まったく、私は総ちゃんの小間使いじゃないんだから！」

この週末は録りためたドラマを二気見してのんびりしようと思っていたのに、寛く暇もなかった。さすがに夜には帰っていったけど、食事が終わってもいつまでも総ちゃんが居座っているもんだから、自分の部屋なのにまったく落ち着けなかった。

この窮屈さを理解してくれるのは、私の他には三佳ちゃんしかいない。それなのに、この冷たい反応はなんだ。

箸を止めてポカンとしているだけである。

「えっと……それだけ？」

私がほしかつたのはそんなリアクションじゃない。

「それだけって、三佳ちゃんなら私の気持ちをわかってくれるでしょう!？」

「うん、まあ、わかるけど。その、初海ちゃんは……食べ、られた？」

「食べる？ そりゃあ、総ちゃんの手料理はこれでもかってほど食べさせられたけど」

総ちゃんは外食が好きではないらしく、食べたいものは作ってしまうんだ。腕前だっで大したものである。

総ちゃんの手料理は好物だから、悲しいかな、すすめられると断れないんだなあ……「朝食は冷蔵庫にあったパンとチーズオムレツで、お昼はテイクアウトのお弁当だったけど、夜は総ちゃんお手製のロールキャベツ。翌朝は、ごはんとお味噌汁の和定食で——」

もちろんそれらは私の部屋のキッチンにて調理された。だからこそ、後片付けや翌朝の下ごしらえが終わるまで、ずっと総ちゃんは私の部屋にいたのだ。

「そういう意味じゃなくて……そうか。実力行使に出たから、いよいよと思ったんだけど」

「なんの話？」

「……なんでもない。私だって、夜中に襲撃されて大変だったんだから」

三佳ちゃんが連れ出されたのは、なんと飲み会の日の深夜だった。そろそろ寝ようと

していたところで突然インターホンが鳴り、カメラに映った訪問者が兄たちだとわかった。三佳ちゃんは必死に抵抗した。

それでも引き下がらない二人に、続きは総ちゃんの車の中で話そうと部屋を出て……今日に至るのだそうだ。

どうりで、三佳ちゃんが部屋を出たのにも気がつかなかったわけだ。私のほうが、三佳ちゃんよりも先に就寝したのだろう。

「多分、帰ったふりをして外で張り込んでたのよ。車に乗ったときにはもう私たちが別々に暮らしていることはわかっているみたいだったから、部屋の灯りでもチェックしてたんじゃない？」

恐るべし、警察の張り込み技術。それをまさか、実の妹の監視に活用するとは。

黙って一人暮らしをしていたことを咎められ、こっぴどくお説教された三佳ちゃんは、罰として亮ちゃんの部屋に住むことになってしまった。

亮ちゃんにとっても迷惑な話だが、私たちが合コンに参加するとわかっているながら引き止めなかったことへのペナルティ、だそうだ。

なんたる横暴とドン引きしたいところだが、総ちゃんに忠実な亮ちゃんはすんなりと受け入れてしまったので、三佳ちゃんも最終的に従わざるを得なかったらしい。

私だってバレたら即座に連れ戻されると思っていた。だけど、私たちにも仕事があり、

アパートには契約だつてある。それを考慮して今のところ猶予が与えられたみたいだけれど、今の生活を続けるための条件が小うるさい監視付き、ということだろう。

「初海ちゃんにはお兄、私には亮次郎で、監視体制は同じでしょ？ でも亮は、私にごはんなんて作ってくれないもの。そこは初海ちゃんのほうがいいわよ。お兄のロールキャベツは、初海ちゃんの好物だもんね」

「あれは……美味しかった」

日曜の夕飯もこれまた大好きな鶏の炊き込みごはんと茶碗蒸しだった。なんだかんだ言っても、子供の頃からの積み重ねで、胃袋はがっちりと掴まれてしまっている。

「あ——成瀬さん、睦永さん！」

「七緒さん、お疲れ様です」

七緒さんは私たちが苗字で呼ぶが、私たちには自分を名前で呼ばせるのには理由がある。

彼女の苗字は「緒方」。本人的には緒方七緒という二回も「緒」が付く名前にコンプレックスがあるらしく、熱心に婚活するのも単に苗字を変えたいだけ、という噂もある。「お疲れ様。この間はごめんね？」

七緒さんは私たちのそばに来るなり、両手を顔の前でパチンと合わせて頭を下げた。

もちろん、先日の合コンの件だ。なんでも相手とはSNSで知り合ったらしく、直接会ったのは当日が初めてだったのだそうだ。

「今度ちゃんと埋め合わせするから。ご希望のタイプがあれば承るわよ？」

正直、それどころではなかったから、気にしなくていいのだけど……

「私は断然、肉食系男子が好みです」

乗り気でない私とは反対に、三佳ちゃんは食い気味で手を挙げる。

——この期に及んでまだ合コンに行く気なの？

めげない精神力はさすがである。

「陸永さんは？」

「私は……合コンは、しばらく遠慮しておきます」

私には三佳ちゃんほどの根性はないから、ほとぼりが冷めないうちにそんな気にはなれない。

丁重にお断りを入れたつもりが、七緒さんはその目を丸くする。

「どうして!? この間のお兄さんによっぽど叱られた？ それとも、もう彼氏ができたとか!？」

「そんなんじゃないです！ それにあの人たちは、私じゃなくて三佳ちゃんの親族ですから」

「ああ、そういえば、三人とも顔の系統は同じだったわよね」

——くっ、どうせ私だけ、成瀬家の面々に比べて顔面偏差値が劣りますよ。

あの二人が三佳ちゃんの過保護な兄であることと、幼なじみのよしみで私もその管理下に置かれていることを説明すると、七緒さんも納得したようだった。

「じゃあ、合コンは別として、陸永さんのタイプってどんな人？」

「あ、そういえば私も、ちゃんと聞いたことなかったかも」

七緒さんからの質問に、なぜか三佳ちゃんがばあっと瞳を輝かせる。

長い付き合いでも、私たちの間で頻繁ひんぱんに恋バナが出るようになったのはつい最近のことだ。なにしろ、お互いに実体験もなければ、この手の話題に過剰反応する人がいるから、意図的に避けていたということもある。

私だって、恋愛には人並みに興味はあった。だけど、できやしないことを話しても空しくなるだけだ。そうやって抑制されていたからこそ、特に三佳ちゃんは社会人になっ  
てからというもの歯止めが効かなくなっただけらしい。

「好きな男性のタイプか……なんだろう」

即答できるほどの確固たるものはないから、改めて聞かれるとちよつと困る。

「とりあえず、肉食系ではないかな？」

なにしろ私には天性の男運の悪さがあるから、ガツガツ来られると不信感を持たざる

を得ない。

私に声を掛けてくるのは、たいがいが痴漢や露出狂といった不審者なんだもん……  
 何度かナンパをされたこともあるけど、見た目も中身もチャライというか、下心が見えすぎていて嫌だった。

「でも、草食系相手だといつまで経っても進展しないわよ？」

三佳ちゃんの言う通り、恋愛経験のない私は、相手が極端な草食系だと、なかなか交際にまで発展することはないだろう。できれば相手にリードしてもらいたいから、いわゆる草食系もダメなのかもしれない。

「私の場合、粘着質か否かのほうが重要なんだけどね。肉食でも草食でも、ストーカー気質だったら一発アウトだから」

「ああ……」

私の意見に、心当たりのある三佳ちゃんが遠い目になる。

男性との心躍るエピソードはなくても、変質者との思い出は豊富なのだ。

だから、そんな変質者から守ってくれるような、優しく頼りがいがある明るくて爽やかな人が理想だ。

しかし、いつ思い出しても碌な体験がない。我ながらよく男性不信にならなかったものだ。自分で自分を褒めてやりたいくらい。

私が恋愛に積極的になれないのは、絶対にこれらのせいだ……

「参考までに、七緒さんのタイプはどんな人ですか？」

私の価値観は当てにならないから、ここは経験豊富な先輩の意見を参考にしてみてはどうだろう。

「私ももちろん家庭的な人ね。結婚後も仕事は続けたいから、家事や育児にも積極的に参加してくれないと。あとは経済力も大事！」

さすがに婚活に力を入れているだけあって、現実的な意見である。そういえば、総ちゃんはこの理想に当てはまるかも。

この週末も散々こき使われたけど、総ちゃんはそれ以上に働いてくれた。

食事の準備はもちろん、重くて動かせなかった家具の移動もやってくれたし、手が空いたときにはパパッと洗濯物を畳んでくれた——下着まで片付けられそうになったときは、焦ったけど。

とにかく、疲れているときに率先して家事をしてくれる男性となら、結婚生活も円満だろう。

「たしかに魅力的ですよ。あ、でも、デートでは外食がしたいな。家では作れないものとか食べたいから」

「初海ちゃん、話が逸れてるよ？」



ついつい食に走ってしまったことを指摘されて肩を竦める。やっぱり私はまだ、色気より食い気が勝っているのかもしれない。

「睦永さん、顔の好みとかは？好きな男性アイドルとか俳優さんとかいない？」

「そりゃあ、世間的にイケメンと呼ばれる芸能人は格好いいと思いますけど、いまいち現実味がないというか。出会うことも、なにかが起こる予感もないし」

「じゃあ、今まで出会った中で一番格好よかった男性は？」

「それは……」

思い当たる人は、総ちゃんしかない。

私を守ってくれたあの日から、総ちゃんは私のヒーローだ。

過保護の度が過ぎていることを除けば、後にも先にもあの人に勝てる人には出会ってはいない。

「いっそのこと、お兄と付き合っちゃえば？」

ニヤリと口角を上げた三佳ちゃんは、兄とよく似た含みのある笑みを浮かべ、とんでもない物件を紹介してきた。

「多少性格に難はあるけど、身内から見てもそんなに悪くないと思うの。経済力もあつて家事全般こなせて、初海ちゃんの心配の種である不審者の対応も万全だよ」

「ちよつと、三佳ちゃん。冗談やめてよ」

三佳ちゃんのことだから、私が総ちゃんと付き合えば自分への監視が緩くなると思っ  
ているんだろうけど、その手には乗るものか。

「お兄にいつて、成瀬さんのお兄さんよね？あれはいい男だったわ。でも、あんな素敵な人がフリーのはずないわよね？」

「そんなことはないです。お兄にいは性格に難があるって言いましたよね？これまでにそんな話を聞いたことはありません」

血の繋がりがあるから逆に、お世話になっている兄に対して、三佳ちゃんは容赦ゆるしがない。

「あらやだ。だったら私が興味あるわ」

それから三佳ちゃんは七緒さんに向かって、総ちゃんの過保護っぷりを披露ひろうしはじめた。それは重度のシスコンとも取られかねない内容で、そんな相手を私にすすめるなんてどうかしている。

言われてみれば、これまで総ちゃんの彼女というものは見たことがない。でもそれは、単に私が知らないだけなのではないだろうか。

年が離れているから学校生活はわからないけど、バレンタインやクリスマスといったイベントで、自宅の前までプレゼントを渡しにきた女の子たちを見かけたことはある。

それくらい、総ちゃんは昔から格好よかった。

私たちの男女交際に厳しく口出ししている手前、大っぴらにしていないだけだろう。もつとモテ人生を謳歌してもよさそうなものだが、変なところで義理堅いのが総ちゃんという人だ。

「でも初海ちゃんならお兄に免疫があるから、お似合いだと思っただけだな」

「まだ言う？」

諦めきれない様子の三佳ちゃんに、思わず苦笑してしまう。

私と総ちゃんが付き合う？——ないない、それはあり得ない。

あの人は兄のような存在でしかない。その考えは総ちゃんも同じで、その証拠に、昼夜問わず一緒に過ごしたこの数日も、艶っぽいことはなにもなかった。

——総ちゃんにとつて、私はいつまでも庇護すべき子供なんだ。

今さらそんな目で見てほしいとは思わない。ただ、女として意識されないのは、年頃の娘としては傷つくこともある。

私を守ってと懇願したのは自分だった。わがままを聞き入れて、実の妹と同じ扱いをしてくれたことには感謝している。

だけど、私だっていつまでも守られるだけの子供ではいられない。

私もいつかは素敵な男性と恋愛がしたい。それ以上に、自立したひとりの大人の女性として生きていきたい。

## 立ち読みサンプル はここまで

親元を離れ、社会人として独り立ちしたばかり。まだ完全にひとりだけでやっていけるとは言えない私が、大人として認められるために越えなければならない最後の壁。それが総ちゃんだ。

もしかして総ちゃんが現れたのは、いわゆる卒業試験みたいなものではないだろうか。「私と総ちゃんがどうこうなる可能性なんてないよ。それに私、見た目だけなら亮ちゃんのほうが好きだし」

だって私、筋骨隆々でいかにも男性的な見た目は苦手だから。総ちゃんも昔のままがよかったのに、なんで鍛えちゃったのかな。

「……それ、絶対に本人たちの前で言わないでね？」

そんなに顔を歪めなくても、あの二人の前で自分の好みを披露するような真似はしない。

それに亮ちゃんも、私にとっては兄みたいなものだ。

「結局、睦永さんは理想はあっても現実と噛み合っていないのかもね。好きになった人がタイプってことになるのかしら」

「そうなんですよ！」

さすが七緒さんはわかっている。

「理想はあるけど、まだこれという人に会ってないだけなんです！」